

「帽子」等の假名遣について

所謂歴史的假名遣の立場に立つ時、字音の假名遣の決定は、固有の國語の假名遣の決定に比して、更に困難な場合が多い。それは、古代支那語の音韻組織が極めて複雑であつたことによるのみならず、我が國の古書にその根據とすべき資料が比較的少いからである。江戸時代の學者の著述の中で、今日に至るまでこの方面の權威とされてゐるものは、本居宣長の字音假字用格と白井寛蔭の音韻假字用例とであるが、兩者の間には相一致せざる所少からず、而もそれらの諸點の大部分については、今日に至るまでなほ學界に定説を見るに至つてゐないのである。例へば、翁・屋をヲウ・ヲクと書くべきかオウ・オクと書くべきか、遣をヰと書くべきかイと書くべきか、淵をエンと書くべきかエンと書くべきか、永・榮をエイと書くべきかエイと書くべきか、これらは現今でもなほ未決の問題として殘されてゐる。併しながら、一口に假名遣の問題と稱せられるものの中でも、例へばアウ・カウの類とオウ・コウの類との混同の如きは、大體室町末期以後に起つたものであつて、その頃までは音韻の上でもなほ區別されてゐたと認めらるべき證據がある。それ故、字音假名遣の問題の中でも、アウ・カウの類とオウ・コウの類との使ひ分け方の如きは、その根據を古書に求めるとしても、略室町時代までの書物に見える用例を調べさへすればよいわけで、従つてその資料には決して乏しくないのである。

ところで、豪（皓號）韻の音の假名遣は、宣長に従へば漢吳音共にアウ韻、寛蔭に従へば漢音アウ韻、吳音オウ韻となつてゐる。何れにしても、帽の漢音の假名遣がバウであることについては、從來異論は無かつたわけで、従つて、

近年出版された大小辭書類は、帽子の歴史的假名遣を皆バウシと記してゐる。然るに古い辭書を調べて見ると、平安時代初期の新撰字鏡に帽の字を保字志と註してゐるのを初として、院政時代の類聚名義抄や色葉字類抄にも、室町時代の節用集や溫故知新書や運歩色葉集にも、すべて帽子にはボウシの假名をつけてゐるのである。而して、管見に入つた範圍の内では、室町以前の書に於てバウシの假名遣を用ゐてゐる例は、未だ見當らないのである。

さて、南都祕極に複製本の收められた正倉院御藏舊鈔本蒙求は、神田喜一郎氏の解説に據れば七八百年前の筆と認められるものであるが、本文の文字の一々に對し振假名を以て音が示してある。それに就いて肴(巧效)韻及び豪(皓號)韻の字音を調べて見ると註一

肴(巧效) 膠・巧・教・鮑

豪(皓號) 好・高・誥・臯・號・草・曹・造・倒・盜・道・導・刀・濤・寶・褒・毛

かやうなわけで、豪(皓號)韻は、一般には疑も無くアウ韻であるが、唇音(ハ行・マ行を指す。ここではハ行。)の場合に限り、規則的にオウ韻を現してゐる。これは、肴(巧效)韻があらゆる場合を通じてアウ韻である事實に比べて、著しい對比をなしてゐる。

又、釋日本紀の正安寫本に就き、注音の章を見ると

肴(巧效) 膠・茅

豪(皓號) 高・誥・竈・刀・稻・蹈・濤・保・老

右は新訂増補國史大系本に據つたのであるが、やはり、肴(巧效)韻がすべてアウ韻であるのに對し、豪(皓號)韻は唇音の場合に限つてオウ韻を現してゐる。

丙ネウ乃照 泡波稻 飽部稻 犛莫交 貌无照
 丙ネウ好教 奥アウ阿道 奥アウ鳥道 奥アウ鳥倒 高去刀 搞カウ古稻 好コウ古到 皇クワン古稻 啤ペイ古刀 号ゴウ義到 豪コウ後刀 毫モウ後刀 告コウ後到 溧シ此老
 豪コウ(皓號) 奥アウ鳥道 奥アウ鳥倒 奥アウ鳥倒 高去刀 搞カウ古稻 好コウ古到 皇クワン古稻 啤ペイ古刀 号ゴウ義到 豪コウ後刀 毫モウ後刀 告コウ後到 溧シ此老
 燥サウ蘇 燥サウ作稻 草サウ七老 糟ゾウ此高 遭サウ作稻 造ゾウ在稻 擣カウ都老 討トウ都好 刀トウ多勞 仞シ多勞 蹈トウ都造 稻トウ觀遭 到トウ多音反 倒トウ丁老
 盜多高 荷カウ土刀 道トウ度告 導トウ度告反 逃トウ土少 腦ノウ乃道 惱ノウ而道 惱ノウ納道 保ポウ波豆 報ポウ普喉 寶ポウ普喉反 寶ポウ普喉反 暴ボウ部報
 毛モウ莫保 牢ラウ羅刀 勞ラウ羅刀 勞ラウ羅刀 老ラウ羅告 老ラウ羅告

又、「法華經音」の假題を以て古典保存會により複製刊行された九條公爵家所藏の古書は、平安末期の書寫に係るものであるが、これに據ると

肴ケウ(巧效) 膠去照反 孝去少反 教去記反 交去照反 校去照反 絞去照反 肴加照反 巧後少反 樂後少反 爪七稻反
 抄租橋反 饒ネウ女交反 丙ネウ乃照反 泡波稻反 飽部稻反 犛莫照反 貌莫照反
 豪コウ(皓號) 奥アウ鳥道反 奥アウ鳥到反 奥アウ鳥到反 高去刀反 搞カウ去稻反 好コウ去到反 鼻クワン去刀反 啤ペイ去稻反 号ゴウ告到反 豪コウ後刀反 告コウ後到反
 溧シ此老反 燥サウ蘇稻反 草サウ七老反 糟ゾウ此高反 遭サウ作稻反 造ゾウ在稻反 擣カウ都老反 討トウ都好反 刀トウ都勞反 仞シ多勞反 蹈トウ都造反
 稻都造反 到トウ刀告反 倒トウ丁老反 盜トウ都高反 荷カウ土刀反 道トウ度告反 導トウ度告反 逃トウ土少反 腦ノウ納道反 惱ノウ納道反 保ポウ彼東反
 報ポウ普喉反 寶ポウ普喉反 暴ボウ都於反 毛モウ莫東反 牢ラウ洛刀反 勞ラウ洛刀反 老ラウ羅告反 破ハ於反

本書の反切を法華經單字のものに比すれば、大同小異である。但し、暴の都於反は部於反の誤であらうし、教の去記反の記も詔の誤であらう。又、膠の振假名メウはケウの誤に相違無い。之を要するに、平安時代に於ける法華經單字や法華經音の吳音は、後の法華經音訓等のものに比して、何ら本質的に相違するものではなかつたのである。

類聚名義抄に「和音」として記載されてゐるものも、少くともその大部分は、普通に言ふ所の吳音の類である。試みに、觀智院本に就いて、關係の文字の和音を見ると

肴(巧效) ケウ(孝・教・交・校・餃・饅・樂) サウ(瓜・巢・窠) セウ(抄) ネウ(饒・夷・丙・闕) ハウ(飽・庖) (ハウ(豹) メウ(貌・聲))

豪(皓號) アウ(奧) カウ(高・豪・告・号) カフ(嗥) サウ(草・造) タウ(刀・到・討・稻・導) テウ(逃) ナウ(惱) ホウ(保・寶・報・瀑) ホ(保) ホオ(暴) モウ(毛) ラウ(勞)

即ち、肴(巧效) 韻アウ、豪(皓號) 韻の唇音オウ、その他一般にアウ、といふ假名遣上の原則は、ここにもそのまま通用するのである。

以上は個々の漢字の音を記した文獻の例であつたが、日常實際に用ゐられてゐた漢語の假名遣も、果して同様のものであつたかどうか、これも一往別に調べてみる必要のあることである。

これについては、類聚名義抄の中にも

肴(巧效) 韻 鳩。鷓ケウシヤウ

豪(皓號) 韻 襖。アヲ 草。履サウリ 萱草。火ンサウ 桃。花石タウクエシヤク 馬道。メタウ 馮。礪。メナウ 帽子。ホウシ

烏帽。エンホウ

のやうな語例があつて、何れも上の原則がこれにも通用することを示してゐる。併し、平安時代に使用された漢語の一層豊富な資料としては、まづ色葉字類抄を挙げなければならぬ。今、平安末期の書寫に係る前田家所藏の三卷本に據つて見ると

肴(巧效) カウ(交・咬・校・絞・蛟・狡・鉸・郊・鳩・肴・淆・醉・教・巧・膠・苴) ケウ(校・教) サウ(爪・蛸・炒・巢・窠) タウ(棹) ハウ(包・飽・鮑・匏・鮑・咆・咆・苞・庖・睥・豹・茅・絜・貌・髡)

「帽子」等の假名遣について

メウ (貌)

豪(皓號) アウ(臆) アヲ(襖) カウ(高・稿・蒿・藁・膏・橋・毫・豪・好・阜・皞・棹・翱・皓・尻・拷・
 號・傲・嗽・螫) サウ(早・草・曹・槽・嘈・漕・操・躁・藻・搔・騷・掃・嫂・棗・竈・阜・鏐・
 造・糙) タウ(刀・盜・稻・倒・嶋・陶・桃・逃・討・濤・禱・悼・道・導・腦) テウ(逃) ナウ(腦・惱)
 ハウ(抱・袍) ホウ(報・寶・保・縹・褰・暴・毛・髦・冒・帽) ホフ(寶) ホ(暴) モウ(毛・旄・毫) モ
 (毛・帽) ラウ(老・勞・潦・醪・牢・泮)

この外になほ滑海澡^{クワツサウ}アラメといふ例があるが、この澡は、藻の誤か、或は藻に通じて用ゐられたものと思はれるから、
 右の表には載せなかつた。日本古典全集所収の十卷本には、現に滑海藻となつてゐる。寶の音ホフは、寶劍^{ホフケン}ホフケン
 と見えるもので、勿論正しくはホウと記すべきものである。なほ、右の表には、色葉字類抄所載の字音は全部集めた
 ので、日常の國語の中に用ゐられなかつたものも多少は含まれてゐることを御承知願ひたい。参考のため、唇音(ハ
 行・マ行)字の實例を擧げると

肴(巧效) 韻 包(カヌ) 飽(ハク) 飽アク 飽アクマテ 飽満(ハウマン) 飽アハヒ 飽(ヒサコ) 飽(カセ) 咆(ホネ)

炮瘡(ハウサウ) イモカサ 炮瘡(ハウサウ) モカサ 苞苴(ハウシヨ) ハウシヨ 苞苴(ハウシヨ) アラマキ 苞々(ハウミミ) 苞(モト) 庖丁(ハウチヤウ) 脬(ハウ) イホノフエ

豹隱(ハウイム) ハウイム 豹隱(キリ) 王豹(ワウハウ) 水豹(ササラシ) 茅山(ハウサン) 茅山(エンレイ) 茅屋(ハウヤク) 茅チ

髣(アミ) 髣星(スハル) 容貌(ヨウハウ) 容貌(ヨウメウ) 形貌(キヤウメウ)

豪(皓號) 韻 報(ホウ) 報(ホウ) 報恩(ホウエン) 報緘(ホウケン) 報(カヘリマウシ) 報(ホウサイ) 報答(ホウタウ) 報幣(ホウヘイ)

報命(ホウメイ) 寶蓋(ホウガイ) 寶冠(ホウクワン) 寶劍(ホフケン) 寶祚(ホウソン) 寶鐸(ホウチャク) 寶幢(ホウトウ)

寶幢 ホウトウ 寶幢院 ホウタウキン 寶物 ホウブツ 寶螺 ホウラ 珍寶 チンホウ 保司 ホウシ 緹緯 キヤウホウ
 褒賞 ホウシヤウ 褒美 ホウヒ 褒貶 ホウヘン 褒譽 ホウヨ 褒ホウ 暴惡 ホアク 暴虐 ホキヤク 暴風 ホフウ
 暴風 ハヤチ 毛衣 ホウイ 毛舉 ホウキョ 毛群 ホウクン 毛嬙 ホウシヤウ 鵝毛 カホウ 鵝毛カホウ (シロシ) 白毛 ハクホウ
 鬚毛 ヒンホウ 烏毛虫 カハムシ 霜毛 サウモウ 土毛 トモ 英鬚 エイホウ 鬚ホウ (カミ) 冒ホウ (ヲカス) 帽子 ホウシ
 烏帽子 エホウシ 帽額 モカウ 鹿モウ (ハタ) 毫 モウ
 抱膝 ハウシツ 青袍 セイハウ 雜袍 サフハウ

即ち、肴(巧效)韻アウ、豪(皓號)韻の唇音オウ、その他一般にアウ、といふ假名遣上の原則は、色葉字類抄にも明瞭に現れてゐる。但し、抱・袍の二字は豪(皓號)韻の唇音字であるから、規則通に行けばホウの音たるべき筈であるのに、實際はハウとなつてゐて、これだけが例外となつてゐる。併しながら、この二字のみがハウの音であることは、決して色葉字類抄だけのことではない。例へば、熊谷直之氏藏南海寄歸内法傳卷二の古點に於ても、豪(皓號)韻の字は

條ホウ 齊條 繫條ホウ 號咷ホウ
 袍襦ホウ 袍袴ホウ 藤帽ホウ 褰灑陲ホウ

かやうに、帽・褰にはホウの假名をつけながら、袍だけが二箇所ともハウの音になつてゐる。同書では、肴(巧效)韻の字に字音の假名を附けた例は無い。次に、文明七年の跋ある成實堂藏本論語鈔を見ると

暴虎憑河ホウコヘカ (述而篇) 動ウ 容貌ウ 斯遠ウ 暴慢ウ (泰伯篇) 衣キ 敝ウ 縕袍ウ (子罕篇) 虎豹之鞞コハウノツクリカワ (顔淵篇)
 以モ 德レ 報レ 怨ヲ (憲問篇) 何以報レ 德ヲ (同) 以モ 直レ 報レ 怨ヲ (同) 吾豈匏瓜ワシニハウクナナリヤ 也 (陽貨篇)

帽子等の假名遣について

容貌(ハ)ヨケレドモ(細註、子張篇)

謂(コ)之暴(堯曰篇)

即ち、肴(巧效)韻の貌・豹・匏がハウ音であるのに對し、豪(皓號)韻の暴・報はホウ音である。但し、袍だけは、豪韻の字であるにも拘らず、前記諸文獻の場合と同様にハウとなつてゐる。因みに、右の諸個處を、安田文庫藏本假名書論語(安田文庫叢刊本に據る)に就いて求めると

ほうこへうか(述而篇)

ようほうをうごかしてこゝにほうまんをさく(泰伯篇)

こはうのつくりかわ(顔淵篇)

こくをもつてうらみをむくひは(憲問篇)

なにをもつてかこくをむくいん(同)

ちよくをもつてうらみをむくい(同)

その他の部分は缺けてゐるが、現に存在する部分のみについて言へば、問題の韻の假名遣は成實堂の論語鈔と全く一致してゐる。就中右の泰伯篇の例は、同一文の中にハウ音とホウ音の對立が現れてゐるので、興味を惹くものである。次に、室町時代の有力な國語辭書である節用集に就いて調べて見よう。今、慶長二年に刊行された易林本に據ると

肴(巧效) カウ(交・校・巧・孝・肴・肴・莠・莠)ケウ(校・教)サウ(爪・笱・筍)サフ(溍)テウ(嘲)

ネウ(饒)ハウ(飽・匏・炮・庖・苞・庖・卯・茆・莠)ヘウ(豹)メウ(貌・整)

豪(皓號) アウ(奥・襖・麤)カウ(高・稟・粟・毫・好・昊・杲・考・拷・尻・皓・號)サウ(艸・草)

早・阜・曹・糟・漕・操・藻・掃・騷・竈・造)タウ(刀・仞・到・倒・盜・駒・桃・濤・擣・禱・稻・蹈)

韜・諂・滔・搢・條・本・道・導・菊) ナウ (惱・腦・惱) ハウ (抱・袍) ホウ (報・寶・保・褒・暴・帽)
 ホ (帽) モウ (毛) モフ (毛) ラウ (老・勞・癆・牢・潦・醜)

但し、英保・佐保姫・三保などの保や、我毛香の毛の如き、充字又は萬葉假名と認めらるべきものは採らなかつた。
 又、帽子の如き唐音語も除いてある。参考のため、唇音(ハ行・マ行)字の實例を挙げる。

肴(巧效) 韻 飽滿 飽食 飽足 匏 紙炮 鏢炮 疮瘡(二個處) 苞飯 庖丁 豹 豹皮 豹尾 卯(十二支)
 卯(時刻二) 芾柴 晷 形貌 聲牛

豪(皓號) 韻 報恩 報答 報謝 報土 知恩報德 貴報 愚報 果報 回報 董報 業報 懇報 宿報 正報
 尊報 珍報 貧報 福報 返報 寶祚 寶鐸 財寶 三寶(佛) 法(僧) 七寶 僧寶 重寶 珍寶 輪寶
 王寶恩 保 保養 保護 莊保 褒姒 褒美 褒貶 暴風 毛穎(二個處) 毛詩(二個處) 一莖 毛錐 毛氈
 毛頭 龜毛 兔角 金毛 霜毛 作毛 吹毛 氈毛 帽子 烏帽子 老耄
 懷抱 袍裳

右の中、老耄のモフは、無論正しくはモウと記すべきものである。以上表示する所を通覽するに、易林本節用集の假
 名遣は、前田家本色葉字類抄の假名遣と、本質的には何ら相違する所が無い。即ち、肴(巧效)韻アウ、豪(皓號)
 韻の唇音オウ、その他一般にアウ、といふ假名遣上の原則は、節用集にも明瞭に現れてゐるし、ただ抱・袍の二字だ
 けが例外をなすといふ點までも、色葉字類抄の場合と完全に一致してゐるのである。

さて、然らば抱・袍の二字は、何故ハウの音になつたのであらうか。思ふに、漢字の中には、一字が數音を有して、
 その各音がそれぞれ異なる意義に配せられてゐる場合がある。例へば、樂は、五角切(ガク)に於ては音樂の義とな

「帽子」等の假名遣について

り、盧各切（ラク）に於ては喜樂の義となり、魚敦切（ガウ）に於てはコノム・ネガフの義となる。然るに、我が國の人は、動もすれば字音の正しい用法を辨へず、或字の持つ數音の中の一つだけを記憶して、之を不當に一般化して用ゐる傾向がある。例へば、覺は、古角切（カク）に於てはサトル意であり、古孝切（カウ）に於てはサムル意であるのに、我が國の人はそのカウの音を知らず、覺醒（カクセイ）のやうにサムル意味の時にカクの音を用ゐる。又、否は、方九切（フ）に於てはイナ・イナムの義となり、符鄙切（ヒ）に於ては易の卦の名となる。然るに、我が國の人は多くはそのフの音を知らず、イナ・イナムの意味の場合にもやはりヒの音を用ゐて否定（ヒテイ）否決（ヒケツ）等のやうに言ふのである。ところで、抱は、普通のイダク・オモフの意味に於ては薄皓切（皓韻）又は薄報切（號韻）の音であるが、別に、掙・攄に通ずる薄交切（肴韻）の音もあり、又、抛に通ずる披交切（肴韻）の音もある。そこで、この種の肴韻に相當するハウの音が、日本人により、誤つてイダク・オモフの意味にまで擴張され、抱膝や懷抱の抱までがハウと讀まれるに至つたといふことは、可能なことと考へられる。因みに、大矢透博士に據れば、地藏十輪經の元慶點の中にも、既に「懷抱乳哺」といふ振假名が存する由である。

袍には、薄褒切（豪韻）及び薄報切（號韻）の音があるが、何れもハウの假名遣には適合しない。然るに、倭名類聚鈔の衣服類四十五、袍の條を見るに、

楊氏漢語抄云袍薄交反字倍乃岐沼
一云朝服

とあつて、ここには明かに薄交反（肴韻）の音を記してゐる。この薄交反と同音の反切は、現存する支那の字書類には見當らないが、これにより、少くとも我が國に古く肴韻の音の行はれてゐた事實を證することが出来る。然らば、袍が平安時代以來ハウと讀まれてゐるのは、即ちこの薄交切の系統から出た音と考へてよいであらう。

なほ、抱や袍の音として、ホウよりもハウの方を有力ならしめた原因の一つとしては、それらが共に形聲要素として包（布交切、肴韻）を含み、且、包を形聲要素とする文字の大多數（飽・鮑・鮑・鮑・鮑・炮・咆・炮・苞・庖等）が肴（巧效）韻に屬してハウの音を有したといふ事實も、或は關係してゐるかも知れない。

次に、一言觸れておくべきは、艘の字のことである。艘は蘇刀切（豪韻）の字であるから、反切から言へば當然サウの音でなければならぬのに、國語で船を數へる助數詞として用ゐられる場合には、古來ソウの假名になつてゐる。即ち、三卷本色葉字類抄のソの員數の部には

艘^{サウ}
艘數也

とある。この中、漢字の右傍についてゐるサウの假名は字の正音を註したもので、漢字の下のソウは實際に國語として用ゐられる形を示したものである。但し、最古の寫本である前田家本にはソの部は失はれてゐるので、右は黒川本に據つた。この「ソウ、舩數也」の註は、十卷本（日本古典全集所收本に據る）及び徳富猪一郎氏所藏節用文字に於ても同じことである。その他、行阿の假名文字遣には「ふね一そう、舟一艘」と記し、伊京集には「一艘、舩」と記し、運歩色葉集にも「一艘、舟」と記す。このソウといふ形の由來は未だ明かでないが、兎も角も、國語の助數詞としては、歴史的假名遣の立場からはソウの方を採るべきもののやうである。

ここでは、例へば萬葉假名に於て刀をトに充て、高をコに充てるやうな、極めて古い時代の字音は問題外とする。併し、少くとも漢吳音が全體今日見るやうな形に近く統一されて來た平安時代末期以來の字音について見れば、肴（巧效）韻アウ、豪（皓號）韻の唇音オウ、その他一般にアウ、といふ原則は、中世を通じて、廣く行はれてゐたものである。試みに、節用集と同じく室町時代の國語辭書である溫故知新書（文明十六年）に就いて調べて見ると

肴(巧效) カウ(孝・效・交) ケウ(孝・教・交・校・狡) テウ(嘲) ネウ(饒) ハウ(鮑・炮・豹・貌) へウ(豹) メウ(聲)

豪(皓號) ワウ(襖・燠・澳) アヲ(襖) カウ(高・膏・豪・好・考・拷・阜・昊) カフ(葵) サウ(糟・掃・騷・藻・造) サフ(曹) タウ(刀・陶・萄・到・倒・悼・盜・禱・稻・逃・道) ナウ(腦・礎) ホウ(報・寶・保・褒・冒・帽・旄) ホフ(暴) モウ(毛・旄) ラウ(老・勞・癆・牢・洵・膠)

右の中、カフ・サフ・ホフは、無論正しくはカウ・サウ・ホウと記すべきものである。温故知新書の時代には、アウとワウとは同音になつてゐたと思はれる。さて、右の表を通覽するに、温故知新書の假名遣も、色葉字類抄や節用集の假名遣と、本質に於て全然一致してゐる。

もつとも、色葉字類抄や節用集や温故知新書は、何れも同種類の國語辭書である以上、假名遣の上でも相互に影響してゐる點が無いとは言はれない。肴(巧效)韻アウ、豪(皓號)韻の唇音オウ、その他一般にアウ、の原則が、往時果してどの位に廣く世に行はれてゐたかを考察するためには、今少し廣い範圍の文獻について調査する必要がある。その際資料となるべき文獻は甚だ多いが、その中で、同一書の中になるべく多くの種類の音の例を含むものを少々出してみよう。

まづ、名古屋眞福寺所藏の國寶將門記では

肴(巧效) 咆ほ

豪(皓號) 傲あ・操さ・褒ほ

次に、親鸞上人の眞筆と傳へられる坂東本教行信證では

肴（巧效） 孝・教・巧・樂・鈔・鬧・包・卯・屍・貌
豪（皓號） 奧・考・豪・號・倒・禱・韜・陶・寶・暴・耗・牢

何れも上の原則によく適合してゐる。次に、鎌倉時代書寫の古文孝經の諸本に就いて調べて見ると、まづ内藤湖南博士舊藏の仁治二年鈔本では

肴（巧效） 教・蛟・郊・貌

豪（皓號） 好・號・曹・操・造・報・勞

大原三千院所藏の建治三年鈔本では

肴（巧效） 校・蛟・郊・貌

豪（皓號） 好・考・號・曹・操・竈・暴

文政六年に阿部正精の摸刻した弘安二年鈔本では

肴（巧效） 貌

豪（皓號） 曹・操・暴

即ち、何れも右の原則によく適合してゐる。これらに據つて見れば、報・暴（ハウにあらず）のやうな字音は、當時博士家に於て、立派な漢音として通用してゐたことが分る。

最後に、點本以外の例として、永正五年書寫の塵袋を見ると

肴（巧效） 孝・教・蛟・塊・巢・炮・貌・豹

豪（皓號） 奧・高・蒿・膏・毫・好・耗・翽・告・號・昊・敖・竈・草・曹・掃・騷・藻・刀・桃・鞞・搗

「帽子」等の假名遣について

道・保・褒・毛・髻・冒・帽・老・勞

これ亦前記の原則によく適合してゐる。但し、第八の卷には大刀契タイケイといふ例が見えるが、刀トは此の語に限られた特殊な讀癖と思はれる故、右の表の中には加へなかつた。

中世に歌學方面で假名遣の規範とされてゐた行阿の假名文字遣も、字音に關しては右の原則に背くものではない。今、語學叢書所收の本に就いて見ると

肴(巧效) 韻 ないけうばう(内教坊) むうこ(犛牛) へう(豹) ねうはち(鑊鉞) はうちやう(包

丁) けうやう(孝養) きつかうてん(乞巧奠)

豪(皓號) 韻 だうめいほうし(道命法師) くわんさう(萱草) めなう(馬腦) くはさう色のはかま

(萱草色袴) ざうり(草履) 御ざうし(御曹司) しんさう(心操) らうろう(牢籠) だうちやう

(道場) らうもう(老耄)

右の中、「けうやう」(孝養)と「らうもう」(老耄)との二つは、語學叢書本の底本となつた古板本にはあるが、文明十年書寫の奥書ある古寫本に無いものである。併し、この二つとても、假名遣の上では前記の原則によく適合してゐる。なほ「ふね一そう(舟一艘)」については、既に述べた通りである。

* * *

かやうなわけで、肴(巧效) 韻アウ、豪(皓號) 韻の唇音オウ、その他一般にアウ、の原則は、漢音・吳音を通じ、極めて廣く行はれてゐたものであるが、これは恐らく古代支那語に於ける發音上の傾向を反映してゐるものと思はれる。B. Karlgren 氏に據れば、古代支那語に於ては、肴(巧效) 韻は *mi* の形、豪(皓號) 韻は *mi* の形であつて、

前者の a は前舌母音、後者の α は後舌母音であつたと推定されてゐる。然るに、後舌母音〔a〕は、之に少しく唇の圓み加れば、容易に〔ɑ〕類の音となる。故に、p b m のやうな唇的母音の直後に續く α 韻が、その影響を受けて、發音上〔ɑ〕の色彩を帯び易いことは、自然の勢である。かやうな傾向が古代支那語に實際存在したといふことは、有り得べきことと考へられる。

併しながら、右は口頭の發音の上の問題に過ぎず、支那人自身の言語意識では、唇音の自然的な影響の如きは何ら感ぜられては居なかつたものと思はれる。即ち、影響は無意識の間に起つてゐたのである。それ故、切韻・唐韻・廣韻の系統の反切に於ても、玉篇・篆隸萬象名義の系統の反切に於ても、豪（皓號）韻に於ける唇音の韻字は、牙喉舌齒等の諸音の韻字と共通になつてゐる。唐代に於ける秦音の實狀を比較的よく反映してゐるものと考へられる慧琳の一切經音義の反切でさへも、この點については前記の諸字書と相連する所は少しも無いのである。

それ故、反切の法が既に理解され、殊に五十音圖を規準として反切を行ふ方法が發明されてから後の日本の學者にとつては、寶をホウと讀んだり、帽をボウと讀んだりすることは、不合理と感ぜられるに至つた。何故なら、字書には寶は博浩切と書いてあるし、帽は莫到切と書いてあるからである。五十音圖を規準として考へれば、博浩切はハウでなければならぬし、莫到切はパウでなければならぬ。彼等は、古への通事や音博士とは違つて、支那人の發音を耳から直接聽く機會を與へられなかつたので、専ら字書の反切（又は分韻）のみに頼つて字音を正さうと力めた。そこで、彼等が反切から理論的に作つたハウ・パウのやうな音形も、中世の文獻に既にぼつぼつ見えてゐる。

まづ字鏡集では、希觀典籍蒐集會の校刊本に據ると

保ホウ 襖ホウ 寶ホウ 報ホウ 抱ホウ
ホウ 襖ホウ 報ホウ 抱ホウ
ホウ 襖ホウ 報ホウ 抱ホウ

「帽子」等の假名遣について

毛モウ (寛永本、白川本) 毫モウ (寛永本) 旄モウ 髦モウ (寛元本)

冒モウ (寛元本) 帽モウ (寛元本)

本之 靡モウ (寛永本、白川本)

(抱のフの音は集韻房尤切、冒のホクの音は集韻密北切に相當する音であらう。褒のホウの音は、或は韻補薄侯切のやうな叶音説から出た音であるかも知れない。褒)

右の中、特に断らなかつた部分は、寛元本・應永本・白川本に共通に存在するものである。かやうに本によつてかなり相違してはゐるが、とにかく、同じ豪(皓號)韻の字の中でも、ハウの假名をつけたものとホウの假名をつけたものとがある。これ蓋し反切音と流通音とが相錯雜した結果であらうと思はれる。

次に靈雲院本童蒙頌韻を見らるゝ

肴韻 交カウ・笈カウ・皎カウ・顛カウ・輜カウ・鏢カウ・袍カウ・袍カウ・茅カウ・茅カウ・類カウ

豪韻 高カウ・蒿カウ・蕘カウ・毫カウ・濠カウ・槽カウ・槽カウ・瑯カウ・紉カウ・袍カウ・旄カウ・髦カウ・滂カウ・勞カウ

かやうに、同じ豪韻の唇音字の中でも、髦がモウであるのに對して、袍はハウ旄はマウとなつてゐる。この中、袍の音ハウは、前記の薄交反系統の音が混じたものとも考へられる。併し、旄と髦とは本來同音(莫袍切)の字であるのに、ここでは、一はマウ、他はモウと振假名されてゐるのである。恐らく反切音と流通音とが相錯雜した結果と思はれる。

次に慶長十七年版の聚分韻略から唇音字だけを抜き出して見らるゝ

肴韻 泡カウ・庖カウ・聲カウ・猫カウ・胞カウ・拋カウ・咆カウ・拊カウ・跑カウ・炮カウ・包カウ・茅カウ・苞カウ・茅カウ・匏カウ

巧韻 卯カウ・晁カウ・鮑カウ・飽カウ

效韻 豹カウ・貌カウ・咆カウ・拋カウ・砲カウ・咆カウ・爆カウ

かやうに着(巧效)韻の唇音がハウ・ヘウ・マウの形であることに問題は無いが、同書ではまた豪(皓號)韻の唇音までが殆どすべてハウ・マウ(反切音)に統一されてゐる。

豪韻 髦^{ハウ}・毛^{マウ}・聲^{マウ}・巷^{ハウ}・袍^{ハウ}・旄^{ハウ}・褒^{ハウ}

皓韻 塚^{ハウ}・抱^{ハウ}・娟^{ハウ}・襍^{ハウ}・寶^{ハウ}・葆^{ハウ}・保^{ハウ}

號韻 髦^{ハウ}・巷^{ハウ}・娟^{ハウ}・報^{ハウ}・眊^{ハウ}・袍^{ハウ}・帽^{ハウ}・瑣^{ハウ}・暴^{ハウ}・曝^{ハウ}・冒^{ハウ}

ただ旄・葆の二字だけが、何故か、ホウ(流通音)の形で取り残されてゐるのみである。

日本古典全集に收められた慶長古活字版和玉篇の中から豪(皓號)韻の唇音字を抄出して見ると

保^{ホウ} 緜^{ハウ} 褒^{ホウ} 寶^{ホウ} 報^{ハウ} 抱^{ハウ} 袍^{ハウ} 毛^{モウ} 髦^{ハウ} 髦^{ホウ} 帽^{ハウ} (褒の音ホツ、及び袍の音スウは、多分原本の誤植であらう。)

やはりハウとホウ・モウとが相混じてゐるのは、反切音と流通音とが相錯した結果であらう。右の寶(ホウ・ハウ)・帽(ハウ・ホウ)の例のやうに、豪(皓號)に屬する同一文字に就きアウ韻の形とオウ韻の形とが並擧される場合、反切の知識を持つ人は、前者(即ち反切音)を正音、後者(即ち流通音)を俗音と評價したやうである。後のものではあるが、享保十一年の音曲玉淵集には、左のやうに記してある。^{註三}

寶^{ホウ}正 緜^{ハウ}俗 褒^{ホウ}俗 報^{ハウ}俗 毛^{モウ}俗 髦^{モウ}俗 帽^{ハウ}俗

併しながら、よしや一部の學者によつて「正音」と認められてゐたにもせよ、ハウ・マウのやうな反切音は、日常實際に用ゐられる言語の中には、殆ど入つて居らず、中世を通じて、依然として古來のホウ・モウの形のみが流通してゐたことは、色葉字類抄や節用集や溫故知新書等の假名遣の示す所によつて明かである。(帽の右傍にハウの假名をつけてゐる字鏡集でさへ、その和訓はホウシと記してゐるのである。)又、傳統を重んずる佛教の方面でも、讀經の音に

はやはり古來のホウ・モウの形を保存してゐたことは、前記の法華經關係の諸文獻によつて知られる。なほ、元和の頃、日遠の著した法華經隨音句の中から、之に關する記載を抄出すること

○衆寶嚴淨文。(中略) 又寶。韻會上聲。曰。補抱ノ切。宮清音文。余レハ。ハウノ音也。然レトモ。是モ天下通同シ

テ。ホウト用ヒ來レリ。今更不レ可改敷。保ノ字モ。同韻同類ノ字也。可知之。(序品)

○保任文。保ハ。補抱切ニシテハウナレトモ。常ニ。ホウノ音ニ用キ來レリ。難シレ改。寶ノ字ノ例也(譬喻品)

○而不卒暴文。釋文云。薄報反云云。韻會號。音切同之。是既號ノ韻ナレハ。ハウノ音ト見タリ。然モ彼ノ韻ノ字ハ。

常ニスホマリテヨム是多シ。報帽之類也。今既以レ報。爲韻切ト。故今ノ暴モ。ホウト可讀敷。(下略)(安樂行品)

ここに日遠が「天下通同シテホウト用ヒ來レリ」「常ニホウノ音ニ用キ來レリ」「常ニスホマリテヨム是多シ」などと
言つてゐるのは、決して法華經讀誦の音のみを問題としてゐるのではない。廣く一般の漢字音について言つてゐるも
のである。何故なら、帽の字の如きは、法華經には出て來ないからである。即ち、この日遠の口吻から推すと、寶・
保・報・暴・帽の類をハウのやうに讀むのは、當時に於ては一種の理想音たるに過ぎず、世上一般にはハウの音のみ
が行はれてゐたことが明かである。

それ故、肴(巧效)韻アウ、豪(皓號)韻の唇音オウ、その他一般にアウ、の原則は、少くとも、平安末期以降、
室町以前の一般字音状態を支配してゐたものとして、依然、極めて重要な地位を占めるものと認めざるを得ない。所
謂歴史的假名遣の立場に於て字音假名遣を決定しようとする場合、この時期を通じて常にボウシ・ホウビとのみ書か
れてゐた帽子・褒美を、今日に於てバウシ・ハウビと書き改めることに、果して幾許の理由があるかといふことも、
當然問題となるであらう。

(一) 表中の教かうの字は、叔教陰徳の教である。併し、この句は孫叔敖の故事に基いたもので、普通の本には、叔教陰徳となつてゐる。もし教ならば豪韻の字であるが、このの振假名カウは、敖・教いづれの音であるとしても、本稿の結論には影響が無い。

(二) 刀(ト)は推古天皇時代の遺文以來盛に用ゐられてゐる字體であり、高(コ)は古事記に既に用例があり、保(ホ)毛(モ)も古事記以前に淵源する古い字體である。さて、豪(皓號)韻の字が古代の韓音で(コ)類の韻形を持つ場合があつたらしいことは、新羅第二十二代の王の諱を記すに

第二十二、智訂麻立干。一作智哲老。又智度路王。(三國遺事王曆)

智證麻立干立。姓金氏。諱智大路或云智度路。又云智哲老。(三國史記卷第四)

かやうに老と路とが相通じて用ゐられてゐる例からも想像される。又、小倉進平先生の「郷歌及び吏讀の研究」に據れば、郷歌の用字の中にも、刀をトの音節に、毛を モの音節に、寶を ポの音節に充てた例がある。本邦の萬葉假名に現れる高(コ)刀(ト)保(ホ)毛(モ)のやうな音が、この種の古韓音と直接又は間接に何らかの關係を持つといふことは、有り得べきこととは思はれるが、なほよく研究すべき問題である。

(三) 享保頃には、アウ・カウの類とオウ・コウの類との音韻上の區別は既に無かつたのであるが、音曲玉瀾集等で扱つてゐる所の諸曲の發音では、なほ古い時代の區別を保存してゐたのである。

追記

豪(皓號)韻の脣音が唐代頃(ヨ)類の母音を以て發音されたらしい證據は、支那文献の中にも見出されないではない。まづ錢大昕の十駕齋養新錄卷五聲相近而譌の條に

李匡文資暇集、今人謂レ帽爲レ慕、保爲レ補今北人讀レ堡爲レ裊、唐時已然、褒爲レ連、暴爲レ步。此由二豪韻一轉入二模韻一也。

「帽子」等の假名遣について

又、敦煌雜錄所收の維摩詰所說經變文に、左の韻文がある。

菩薩慈悲莫疑慮。	禪堂寂靜無依怙。
修行直感動天宮。	入定伏得龍兼虎。
我今來 蒙法雨。	塵勞已滅心開悟。
報答何酬說法恩。	師兄收取天宮女。
出天門 下雲路。	來時不捧法珍寶。
得禮慈悲大法王。	師兄收取天宮女。
解歌音 能律呂。	簫韶直得陰雲布。
日夜交伊暖法堂。	師兄收取天宮女。

(以下略)

ここでは寶が路や女と相韻してゐる。たとひこれらが標準音ではなかつたとしても、とにかく古代支那語の發音傾向の一端を示すものとして、参考にする價值があらう。

昭和十九年七月十五日 印刷
昭和十九年七月二十日 發行

國語音韻史の研究

◎ 定價七圓八十錢

特別行爲稅相當額七十錢

合計 八圓五拾錢

(一四五〇部)

出文協承認 あ460208



著者 有坂秀世

發行者 清水達夫

東京都澁谷區大和田町四十二番地

印刷者 北川武之輔

東京都京橋區銀座四丁目四番地

印刷所 (東東六〇) 細川活版所

東京都神田區淡路町二ノ九

發行所

東京都澁谷區大和田町四十二番地

振替東京八三九三三
電話澁谷三八〇二
會員番號一三四〇一一

明世堂書店